

# 今を未来に

## 保々のつどい開催される（2月2日土曜授業）

心配されたインフルエンザも、先週はいったん小休止の状況になり、無事に「保々のつどい」を開催することができました。また、今年度は準備した保護者席200席があつという間に埋まり、保護者席が足りないといった状況になり、多くの保護者の方にご迷惑をおかけしました。「後ろの方の席では子どもたちの姿が見にくい。」ということから後方の椅子が空席になっていたことも考え、次年度は児童席の両サイドをうまく活用できるように、反省点として申し送りたいと考えています。たくさんの保護者・地域の方に参観いただけたことに、改めて感謝申し上げます。

この一年間生活科・総合的な学習の時間の中で学んできた「みんなが幸せに生きるために」「自分がどんな生き方をしていく人になっていきたいのか」を、授業中の子どもたちの考えや発言、気づきをもとに、各学年の発表内容は考えられました。そこに、高学年になると、子どもたちが考えたアドリブ的内容が加えられたものになっていました。

## 1年生：じぶんだいすき・ともだちだいすき～いっしょにあそべてたのしかったよ～

入学をした日、どの子も期待と不安を感じていました。いろいろな保育園や幼稚園から入学してきた子どもたちでした。いっしょの保育園や幼稚園に通っていた友だちがたくさんいる子もいれば、一人で入学してきた子、1年生の途中で転校してきた子、海外から戻ってきた子、今年度の1年生もいろいろでした。



いろいろな友だちがいるからこそ、いろいろな事がわかってきました。「おはよう、ザオシャンハオ、オラ、ボンヂーア、グッドモーニング」朝の挨拶の言葉もちがいます。お手製の名刺を作って、友だちを知るために行なった名刺交換、隣のクラスの子とも交換をしました。「学校探検」では、保々小学校の中を隅々まで探検しました。一番大切な出会いは、学校で働く「人」との出会いでした。教頭先生、用務員さん、保健室の先生、学校業務アシスタントさん・・・小学校はたくさんの人が働いていて、自分たちを大切にしてくれていることを知りました。

2学期からは、遊びを通してさらに友だちが近くなりました。あやとり、けん玉、コマ、お手玉、ケンパ、ゴム跳び、そして2人でできるようになったなべなべそこぬけ、どの遊びもコツがあるようです。外国にルーツを持つ友だちやその家族から「ラオインゾォシャオジー」「ジギジギザ」を教えてもらいました。国が違えば言葉だけでなく、子どもの遊びもいろいろあることを知りました。保々幼稚園・保々保育園の年長さんを招いて、いっしょに遊びをしました。自分ができればいいのではなく、遊びのルールを説明し、見本を見せなければいけません。一生懸命に練習し、授業参観の時には家の方にお客さんになってもらって、アドバイスもいただきました。

自分大好き・友だち大好き、そのキーワードは「みんながいっしょに」そして、「みんなの違いに気づき、その違いを大切にすること」ということだと、1年生の発表から感じました。

## 2年生：わたしたちのまちたんけん～ほぼの人たちと出会う～

2年生は毎年、生活科の学習で保々の町探検を行ないます。1年生の時は学校の中でのつながりを学び、2年生ではそのつながりを保々の町まで広げます。今年の2年生は1年生の時にも町探検をしたことがあったので、テーマは「人との出会い」として、探検をしました。保々の自然に親しむ会のみなさん（サツマイモづくり）、柴田さん（西村町のホテルを大切に守ってみえる方のおひとり、保々の自然に親しむ会の代表）から保々の自然を守ってみえる方々の温かい心遣いを学びました。



2学期は、山条高原のカドワキ牧場の見学をさせていただき、牛の世話をどうされているか、教えていただきました。カドワキ牧場の子牛はどこからやってくるのか、牛が気持ちよく過ごせるようにと考えた様々な工夫、門脇さんがどんな思いで牛を育ててみえるのかも知りました。学校へ戻って「いのちをいただく」「きみのいえにもうしがいる」の絵本から「とく」（牛や豚をお肉にすること）仕事に対するその家族の気持ちや「命をいただいて私たちが元気になっていること・育っていること」に気づきました。そして、牛乳、ランドセル、グローブ、カプセル、ハンドクリーム、お肉だけでなく牛からいろいろな物が作られていることも知りました。「いのちをいただく」ことについて、そして、みんなの考えを聞いていたら自分たちの心や体がスッキリしてきたこと、みんなの命の大切さを保々のつどいで伝えたくくなりました。

## 3年生：キラキラ保々キッズ2018～明るくみんなにやさしい、親切なまちって？～

学校の周りには、どんな施設があるのかなあ？2年生の時に地区探検をしていたので、ふれあい会館、聖十字さん、JA、保々郵便局、もみじや、保々保育園、保々幼稚園、殖粟神社、保々中学校、広い田んぼ、地域のみなが利用する場がたくさんあることは知っていました。でも「郵便局は昔どこにあったのかなあ？」「郵便局って何ができるところ？」「聖十字さんに入ったことある？」と聞かれると、ほとんどの子が「えっ？そう言えば知らない。」「に入ったことはないなあ。」となりました。



1学期には郵便局見学と聖十字さん訪問をさせていただきました。見学をするまで郵便局は「貯金ができる場所」と思っていたのですが、世界中にハガキであれば70円を出せること、荷物も届けてくれること、保険の仕事もあることを教えてもらいました。郵便局の中を見せてもらった時には、点字ブロック、低めの荷物台、乗せただけで料金がわかる秤、誰もが使えるメガネや椅子、小さい子が待っている間に読める絵本などがあることにも気づきました。何より働いてみえる方みなさんが笑顔であること、いつ行っても誰か局員さんがいることもすごいなあと思いました。

聖十字保々在宅介護サービスセンターでは、クラスを半分ずつのグループに分けて、デイサービスを受けてみえる利用者の方と交流をさせていただきました。何を話していいか悩んでいると、お年寄りのみなさんから話かけてもらえました。お手紙を渡すと「字が上手ね」とほめてもらった子もいました。でも、中にはうまくお話ができない方もみえました。



なぜなのかなあ？その疑問の答えの一つ「認知症」について、ゲストティーチャーから教えていただきました。また、絵本から「認知症」とは、今までの記憶や思い出が、木の葉がパラパラ落ちるように飛んでいってしまうのと似た症状なのだと知りました。さらに、認知症の家族とともに暮らすことをテーマにした絵本「ばあばは、だいじょうぶ」を読んで、家族だからこそ助け合えることに気づきました。そして、元中学校の先生で認知症になった佐藤さんのメッセージから認知症になった方本人の思いを知りました。自分たちの会話の中で、相手を攻撃する時に「ボケ」という言葉があり、おうちの方から言われたことがある子もいます。何も考えずに使っている言葉の中に、人を傷つける・馬鹿にする言葉があること、そんな言い方はやめようと気づける自分になることが「優しい親切な保々の町」をつくることになると発表できました。

#### 4年生：だれもが安心できるまち

誰もが安心できる町ってどういうこと？助け合える、お互いのことをよく知っている、あいさつができる、そんなキーワードには気づきます。でも、あいさつができれば安心できるまちって言えるのか、いろいろな人が集まる所、みんなが利用している所に行って調べてみることにしました。



そこで選んだのが北勢中央公園です。公

園の所長さんから公園の4つの役割（たくさんの方が利用しやすい、自然に親しむことができる、スポーツを楽しむことができる、避難所として利用することができる）のために、いろいろな工夫がされていることをみつけていきました。でも、そのためにあるはずの地図に新しい施設が説明されていなかったり広い公園に案内板が少ないこと、やっとみつけた多目的トイレが壊れていて使えなくなっていたことにも気づきました。誰に言えば考えてもらえるか、三重県には気づいたこと、改善して欲しいことは誰でも「さわやか提案箱」に投書できることを知って、案内板の数を増やして欲しいことと多目的トイレを使えるようにしてほしいことを書いて投書してみました。1か月後、案内板が増やされ、壊れていた2カ所のうち1カ所は直して使えるようになったこと、もう1カ所は修繕方法を検討していることを三重県四日市建設事務所からの返事で知ることになりました。行動すれば、改善してもらえることがあることを子どもたちは体験しました。

そして、2学期が始まったすぐに北海道胆振東部地震が起こり、大きな被害があったことや大切な命が奪われたことを知りました。私たちの保々の町は大丈夫なの？ちょっと不安になりました。自分の命を守るために避難する時の約束「おはしも」を確かめ、さらに小学校と地区市民センターにある防災倉庫の中を調べさせてもらいました。トイレや救助用の道具など、両方の倉庫に共通して入っている物もたくさんありますが、非常食の種類やおむつなどの数が違うことにも気づきました。防災倉庫がどこに設置されているか、その近くの避難所にどんな人が避難してくるかを考えて、中身に違いがあることがわかりました。と同時に、これだけの中身では特に水や食料は足りない事にも気づきました。自分用の避難袋はあるのか、そんな話をしていたら、誕生日プレゼントに自分用の避難袋をお願いした友だちがいることを知りました。さらに、小学校の体育館は避難所になっていることから、実際にそこで寝られるか体験学習をしました。思っていた以上に木の床の体育館では寝にくいことにも気づきました。そして、こうした避難所では、赤ちゃんがいる家族、言葉が通じにくい人、病気を持っている人、お腹に赤ちゃんがいる人、避難所に行きにくい人、たくさんの方が困っていること・困るだろうと考えられることに気づき、自分たちにできることは何かを考え、保々のつどいでみんなに伝えていこうと考えました。

誰もが安心できる町にするためには、まず自分にできることがある。4年生の発表から学んだことです。

この4年生の発表を聞いて「避難所には避難しにくいなあ。」と思っていた保護者の方が「北勢中央公園や防災のことは私も先生とお話させてもらったし、みんながどんな風に考えていったのかがよく伝わって、胸にじんとききました。保々小でわが子が過ごしてきたこと、これからも保々で過ごしていくことを、これで良かったと改めて思いました。避難所生活なんて考えられないから避難はしないと思ってきたけど、みんなの発表を聞いていざという時には避難してみようと思いました。」というお手紙をいただきました。

## 5年生：立ち上がろう！いのちを守るために私たちができること

米作りの活動を思い出す漫才から始まった5年生の発表でした。そして、困った時に登場するゴネンジャイ！登場する時の決めポーズにも得意なことが入っていて、見ているみんなから「おー！すごい」の声。保々の自然に親しむ会の方が毎年5年生の米作りを助けていただけるのは、保々のことや保々の自然のことをもっと知って欲しいからかなあと考えていきました。5年生



はそのことを確かめるため、自分たちで夏野菜づくりをすることにしました。8種類の野菜作りに挑戦をしましたが、始まってすぐ、その畑の様子に違いがあることに気づきました。ナスの畑には草が生えていません。ナスグループの友だちがなぜ毎日草を抜いて水やりを欠かさないのか聞いてみました。「みんなの笑顔が見たいから」友だちのその言葉から、みんなでやることの意味を考えました。校長先生や齋藤悟さんはどうだろうか、直接聞いてみました。『みんなのために』ということが共通している思いでした。さらに、校長先生は「自分のやりがい」、齋藤悟さんはプロの農家として「おいしい野菜やお米を食べてもらいたい。失敗することの方が多けれど、そこから学んだことを工夫して、次どうするかを考えることが大好き」ということを教えてもらいました。自分たちで育てた野菜はやっぱり一味違いました。苦手な野菜もおいしく感じました。

齋藤さんが育ててみえる作物の中にジャガイモがあります。ジャガイモが昔は「悪魔の実」と言われていたことを知った5年生は、本当のことを知らないために言っている迷信はないだろうかと思って、普段何気なく使っている迷信を調べてみました。調べてみるとたくさんの子が家の人から言われたことがある「ご飯粒を残すと目がつぶれる」というものがありました。食べ物を大切にすることを伝えたいために使っているこの迷信に「あの人みたいになるで」と言われているみたいで、いい気持ちがしないように感じました。もっと考えてみると「体が不自由な人が聞いたらどんな気持ちになるのだろうか」ということに気づきました。また、私たちが住む四日市にも「四日市の人はみんなマスクをしている」「四日市の人は鼻毛が長い」と、他地区の方から言われていることを知って、なぜそんなことが言われるようになったのかを調べていきました。このように言われるようになったのは「四日市公害」が理由であることを知りました。でも、四日市に住んでいながら「四日市公害」のことを知らない自分たち、昔のことにしてしまっている自分たちであることに気づき、四日市公害について深く学ぶことにしました。ここで再びゴネンジャイ（5人のアカネンジャイ）によって、石油コンビナートが作られ、生活は向上したが、その代償として海が汚され、空気が汚され、汚れた空気を吸うことで気管支炎や喘息の病気にかかり、たくさんの人が亡くなったことが伝えられました。喘息の苦しさを体験するため、15秒全力で走って、ストローで息を吸う（気管支炎で息が吸えないことを体感）ことを全



員でやってみせてくれた5年生。発表のあと私もやってみましたが、苦しいというより本当に息が吸えないことがわかりました。現在の四日市ではどこでもきれいな空気を吸えるようになっていますが、それは立場を超えて公害をなくすこと、人にはきれいな空気を吸う権利があること、それは憲法が保障した基本的人権であるという視点で裁判を起し、国の考えを変えていった先人がいたからこそであることを知りました。

今、5年生は四日市公害を学んだことで終わらさないように、また、公害患者の方々が今も苦しんでいること、国道23号線やミルクロード周辺では排気ガスによって昔より空気が汚れていて、この保々にも新しい高速道路が走ることに不安も感じ、自分たちにできることがあると考え、各グループで活動を始めました。みんなで行動することが世の中さえ変えることができると信じて活動を進めています。

## 6年生：差別をなくしていくためには

学びのテーマは違いますが、6年生はこの5年間人権に向き合う学習を積み上げてきました。私たち教職員も子どもたちが6年生になった時に、部落問題学習ができる子＝いろいろな人権課題を他人事にしない・自分事として考えることができる子になって欲しいと考え、生活科・人権総合学習を考えてきました。6年生は、修学旅行でも日本初の人権宣言と言われる「水平社宣言」が山田少年によって読まれた旧岡崎公会堂を訪れ、ビデオ「友情のキックオフ」や「識字学級」で学んだことを全校のみんなに伝えてくれました。



文字が読めないことが命を奪われることになることもある、そして、直接的ではなくても命を奪われているのと同じような思いをして生きなければならない人がいることを知った6年生は、差別によって苦しい生活を送り、家の仕事や下のきょうだいの世話をするために学校へ行くことができなかつた吉田一子さんのことを紹介した「ひらがなにつき」を暗唱して、一子さんの思いを自分の思いとして、伝えてくれました。「ラーメン食べようと思ったけど、漢字がわからないので食べないで帰ってきた」「漢字をみたら頭が真っ白になる」「(そんな自分が) 帰り道、情けのうて、情けのうて」「昔は学校行かれへん人が多かつたから、字知らへんでしょ、せやから車の免許もとられへん」「調理師になるのも試験通れへん、何回も字勉強してね。何回も何回も落ちてね」「駅で落書きを観ました。びっくりして、腹立って、涙でできました。」「何を考えているんやろね。大事なかわいい字つこて人の悪口書いてバチあたりまっせ」一子さんにとって字を取り戻すことは、生きていく喜びや楽しみ、自分の自信を取り戻す＝命を取り戻すことであつたのです。そして、字を奪つた理由が部落差別であつたことを知りました。このことは、以前学習をした「友情のキックオフ」で主人公の父親が「部落差別なんてまだ知らなくていい」と言った意味を考えたり、差別をなくそうと行動してみえる本江優子さんから差別について考える4つの立場(差別をする人、差別を受けた人、差別を無くす人、差別に対して無関心な人)の話から自分はどんな生き方をしてきたか、これからどんな生き方をしていきたいかを考えてきた6年生だからこそ、深く考えることができた学びでした。

そして、先日本江さんとともに差別をなくそうと活動されている松村元樹さんから、自分の当たり前を人に押し付けていないか、ありのままの自分であることができる、また友だちがそのままでいられる自分であることはできているか、を考えられる生き方が差別を無くしていくことになると教えてもらい、今までみんなに話せないでいたことを語り合つた6年生。みんなが聞いてくれる雰囲気があつたから言えた・聞き合えたことを経験した

6年生は、まず自分を隠すために着ている着ぐるみを脱ぎ捨てたい、また着ぐるみをきている友だちがその着ぐるみを「あなたがいたから脱ぎ捨てることができた」と言ってもらえるような自分になっていくことを、宣言した保々のつどいでした。

### 教頭先生の終わりの言葉から

みんなが真剣に考えてきたことを楽しさも入れて発表してくれた保々のつどいでした。教頭先生の話が1年生の発表の中に出てきたとき、とっても嬉しく感じました。それは、人の心の中に自分がいることは、とても嬉しいことだし、大切なことと思ったからです。

今日の発表はどの学年にも人がいました。自分のこと、友だちのこと、命をいただくこと、お年寄りのこと、公園を使う人のこと、四日市公害に苦しんだ人のこと、文字を奪われた人のこと、差別をなくそうと行動をしている人のこと、そうした人の思いや願いがみんなに伝わって、みんなの心の中に人への思いが育っていること、自分のこととして考え人を大切にする生き方をみなさんがしようとしていることが伝わってきました。

隣にいる子の本当の気持ちに気づき、クラスみんなのことに気づいて、考えられる人にみなさんが育ってくれることが楽しみになりました。

### 学校運営協議会の委員のみなさんから

保々のつどいの後、学校運営協議会を行ないました。委員のみなさんから次のような感想をいただきました。

- ・教頭先生が言われた「人の心に自分がいる」ということが本当によく感じられた発表で、子どもたち一人ひとりの成長が感じられました。
- ・特別支援学級の子どもたちが今日の発表の中でも支えられている姿があった。子どもたちといっしょに活動をしている時も私は気にして見ているが、いつも必ず誰かが関わってくれているので、だから今日の発表の時の姿になっているのだと思った。
- ・命をいただいているという思い（考え方・受け取り方）はみんなに通じる。全てのことに通じることと感じ、そのことに気づいている子どもたちの姿を嬉しく感じました。
- ・中学校の教員全員に見せたいと思った。1年生の発表の中にいろいろな園から入学したことや、いろいろな国にルーツがあることを子どもたちが知っていることはとっても大切で、そのことを言葉の違いや遊びを知り、自分の国の言葉でみんなが歌ってくれる、また発表の中に楽しみを取り入れ子どもの得意を生かしている場面があって、とてもよかった。言葉を覚え、言葉で思いを伝えるという経験もとても大切と感じた。
- ・地域が大切にしていることが子どもたちに伝わっていることが伝わってきた。感謝の気持ちを伝えてもらって、今日の発表をみていった方がきっと地域の方に小学生がこんな感謝の気持ちを言ってくれていたと伝えてくれるだろう。それが、また地域の方の元気になると思った。
- ・ご飯粒を残すと目がつぶれるって、自分も自分の親から物を大切にするために言われてきた言葉で、自分も子どもに言ったことがある。これからは、いい方を考え直さなあかんと思った。子どもたちから教わるのがたくさんあった。
- ・防災倉庫について、子どもたちが毎年見てくれて、発表をしてくれているが、地域の大人の方の方が防災倉庫に何が入っているか知らないのではないだろうか。ここ数年、輪番で地域の方に防災倉庫の点検をしてもらっているのはそのためでもある。

各ご家庭でもきっと子どもたちの発表に対して感じられたことを、お子様にお話はいただいたと思いますが、そのお話いただいたことをよろしければ担任の方までお伝えください。子どもたちにその思いを伝えさせていただくことで、自分たちが考えたり気づいたりしてきたことについて、振り返りの機会になると思うからです。よろしくお祈りします。